

## 都市政策・地域経済ワークショップI 第12回 議事要旨

【テーマ】芸術祭と地域づくりー森ラジオ ステーション×森遊会

【講師】アーティスト 木村崇人氏

【日時】2023年6月30日(金) 18:30~21:20

【場所】大阪公立大学大学院 梅田サテライト 101教室

### <議事要旨>

「地球と遊ぶ」をテーマに自然現象を利用し、「越後妻有 大地の芸術祭」、「台湾麻豆糖業台地芸術祭」、「あいちトリエンナーレ」など大型美術展等に参加している、アーティストの木村崇人先生をお招きし、アートによる過疎地の地域課題解決の可能性、パンデミック後のアートと地域づくり、そもそもアートとは何なのかをテーマに、「森ラジオ ステーション×森遊会」の事例とともに作家の立場からのご講義をいただいた。

### 1. 「地球と遊ぶ」をコンセプトに

二十数年間、作品のコンセプトを「地球と遊ぶ」こととしている。「地球」を頭の中で知識として考えるのではなく、地球で起きている自然現象を実際に体験して肌で感じる事によって、その存在をより正確に身近に感じるため「遊ぶ」ことが大切である。「遊ぶ」という行為には実験、観察、発見を繰り返す特徴があり、遊びを通して学習した事は、生きた知識として体に蓄積すると考えている。

### 2. これまでの作品

#### 2-1 木もれ陽プロジェクト

越後妻有アートトリエンナーレ 2006 にて、「星の木もれ陽プロジェクト」を開催。本来丸い太陽の形の木もれ陽を、大型クレーンと9000Wの特殊ライトを使用し、星の形をした木もれ陽を観察することができる広場を作り出した。

#### 2-2 雲になる日

東日本大震災をきっかけに、便利さを追求するがあまり、人が自然の一部であることを忘れてしまいがちな時代に、生き方の原点に立ち返り制作した作品。

太陽光を利用する青写真の手法を用いて制作する。台湾麻豆糖業台地芸術祭にて、台湾で暮らす人々の協力を得て制作された。青は空を、白は雲をイメージしている。

#### 2-3 カモメの駐車場

鳥は体を休める時、風が吹く方角に顔を向ける習性があり、この鳥の習性を見て、昔の人は風見とりをデザインしたのではないか。その気づきを瀬戸内国際芸術祭 2010 にて形にした作品。地元の要望があり、初めは会期中だけの予定であったものを、現在もなお展示しつづけている。

その他食材に直接電気を流し込み、調理を行い、フルコースを作るパフォーマンス、牛の内臓を天井からぶら下げる作品など、今と全く違う印象を受ける作品等の紹介もしていただいた。

### 3. 森ラジオ ステーション×森遊会

#### 3-1 森ラジオ ステーションのはじまり

2014 いちはらアート×ミックス芸術祭にて展示を行ったことがきっかけとなった。日本人にもっと森に目を向けてほしいという願いがあった。60種以上の山野草と苔で覆われた保線員の詰所小屋を森にみたてた。近隣の森にマイクが設置してあり、さまざまな動物の営みをライブで聞くことができる。朝は賑やか、昼は静か。時間帯によって全く違う普段聞くことのできない自然の中の音をライブで聞くことができる。音だけに限定することにより五感が研ぎ澄まされて人それぞれの感覚を味わうことができる。

#### 3-2 森遊会による通年維持管理へ

本来芸術祭で設置されたアート作品は芸術祭が終わると作品を片付けるのであるが、会期終了後も有志団体「森遊会」により、通年維持管理が行われている。

アーティストから声をかけたわけではなく、地元メンバーからの声で、森遊会が結成。現在は約50名程度が在籍し、豊かな森をイメージしながら維持管理を行っている。

映画やドラマに使用されたり、結婚式の会場になるなど、さまざまな分野でアート空間が活用されており、今後は観光名所としても注目されるであろう。

### 4. アートとは

自分の作品の多くは、老若男女問わず現象に触れることができるようにしている。「地球と遊ぶ」ことで繊細に変化し続けることで起きている自然の大きな変化を、情報として知るのではなく実在する地球という存在そのものとして、個人個人が体で感じて考えてほしいと考えている。

また、地域と芸術祭は簡単につながれるものではないが、芸術は人の気持ちを動かすものだと思っている。人の内面、気持ちは根っこのように表情には表れないが、作品をつくることにより人を通して自分自身が学び、成長させてもらっていると感じている。

#### <質疑応答>

Q1:市原市地域の方が元気になればと考えて森ラジオ ステーションを制作したのだと思うが、一方で地域の方が興味あるので取り組んでいるようにみえた。意図してつくったのではないようにおもうがいかがか。

A1:決して自分の思った通り進んでいるわけではないが、自分の力量よりおもしろいものができるのは、人と関わるからであると思っている。その変化自体を楽しんでいる。様々な

出来事の対応方法で作品が変化する。作品といっても作品だけ見られているのではなく、作品に関わった人も一緒に見られている。このつながりが大きな成果につながると考えている。

Q2: :芸術祭は参加人数が評価につながると思うが、先生の作品は集客をメインに考えていないように見受けられる。バランスをどう考えているのか。

A2: :芸術祭終了後、役所、市民等と意見交換会を行ったところ、役所は集客が見込めなかったという意見であったが、市民は決してそのようなことは思っておらず前向きで、いい経験になった、楽しかったという意見が大半であった。芸術をきっかけに街を活性化することができた。数字には現れないが、心が動いたという意見が多く、芸術があったからこそその結果である。数字にとらわれることなく、心に残る消費されない作品を作りたいと考えている。

Q3: :今回の森ラジオの作品は芸術祭が終わってからも続いている作品であるが、普通はこわすものなのか。

A3: :こわすのがほとんど。まつりの扱いと同様、一時的なものとして許可が下りている。しかし中には、こわさずに残すと決めて作成するものもある。作品を作ってもこわすときは産業廃棄物となることには疑問を感じる。

Q4: :人それぞれの考え方があるとおもうが、木村先生が思うアートとは？

A4: :アートだからこそできることがあると思う。アートにしか表現できないものがある。アートとは「ひとのこころをうごかすもの」

Q5: :森ラジオについて、人が関わることによりどのように感じているのか、また作家としてどのように関わっているのか。美術館の展示というアートの在り方について

A5: :森ラジオについては「×森遊会」という名前にも現れているように、人も作品の一部としてとらえている。そのようなメンバーがいてくれることはとてもうれしい。自分の作品ではあるが、起こることはコントロールできない。以前一度作品が全く違う方向にいった時があったが、客観的に距離を置いて反応を楽しんできた。それがゆえに長続きしているとおもっている。

美術館展示作品が少ない理由は特にないが、常にフレッシュでいたい。新しい場所、新しい人と出会い、作品を作るのがとても楽しい。美術館からの依頼があればしないわけではない。

Q6: :現代美術はさまざまだが、テーマを「地球と遊ぶ」と決めた理由は

A6: :学生のころは牛の内臓などを展示していた。その後フランスに行った際、同じものを見せた際、日本と全く違う反応があり、みんなにわかる作品とは何かを考えるようになった。世界共通である「自然」「地球」を取り扱いたいと思ったことがきっかけ

Q7:森のトンネルは森遊会からの提案だったと聞いたがどのような経過があったのか

A7:はじめごみが捨てられていた場所に地域の人々からここを森につなげようという話があがった。2年間悩んだが、やはり人とのつながりを大事に、メンバーの気持ちを第一に優先し、森のトンネルをつくることを決めた。

以上